

第117回 めぐる めぐる めぐる因果は糸車

IT生

表題の文句は、坂本九による歌の歌詞である。NHKの人形劇「新八犬伝」の主題歌でこの音楽が流れるころになると、公園から子供がいなくなるといわれた人気番組であった。

このところ、災害史の年表とにらめっこしている。寺田寅彦師は「災害の歴史はめぐる」といったが、まさにその通りだとわかる。

年表を引っ張り出したのは、寺田師が「天災と国防」で著したように、明治末から終戦後までの期間と、阪神大震災以降の平成、令和の30年が酷似していると感じたから、比較検討しているのだ。

明治末から終戦直後までの間は、巨大災害が頻発した時期で、日本と中国、太平洋戦争と重なった受難の時期だ。阪神大震災からの30年間も災害が頻発しており、さらに今後、南海トラフ地震、首都直下地震が心配されている。もっとも、明治～昭和間は防災対策が近代化されていないため死者数は1000人規模だ。これに対し、平成～令和はふたつの大震災をのぞき、100人規模に収まっている。死者数を比較すると、明治～昭和間は、関東大震災の10万をふくんではあるが16万にのぼる。平成～令和は3万1千人ていど。災害の頻度は両期間通じて変わらないから、防災の近代化の効果はあったのだろう。

21	1888	2	神田大火
24	1891	7	東京防火令、公布
25	1892	10	鶴梯山、噴火
27	1894	6	濃尾地震
29	1896	10	震災予防調査会官制、公布
		4	庄内地震
		8	河川法、公布
		6	15 明治三陸地震
1897		8	31 陸羽地震
		3	30 砂防法、公布
		4	12 森林法、公布
99		3	20 罹災救助基金法、公布
		7	17 安達太良山、噴火
		8	伊豆鳥島、噴火
		8	関東大水害
		12	桜島、噴火
			東京湾台風 (大正6年の大津波、高潮災害、)
		1	関東大震災
			震災地に非常徴発令、戒厳令適用の件、公布
			「震災二付テノ処置ヲ為スコト」
			帝都復興一

近代化してもしなくても日本では災害は起こり続け、犠牲者は減らない

しかし、大震災の頻度は明治～昭和が1回、平成～令和が2回で後者が上回る。しかも、今後30年間の間に起こるとされる南海トラフ地震は想定では死者（関連死を含める）30万をこえるこのほか、首都直下地震（安政の地震は首都直下と南海トラフが二年続けて起きた）、千島・日本海溝地震が控える。となると、明治、大正、終戦年間の16万ははるかにこえる。

防災の近代化は進んでいるはずなのに、人的被害の全体規模はなぜ縮小しないのか。寺田寅彦師の法則によると、「文明が進むほど天災の程度も累進する傾向がある」となる。文明が進むということは、省力化につながるということであり、省力化が社会に広がれば人間の孤立化も進む。大災害で一時的にせよ社会が前近代化社会にもどれば、孤立化した人間はたちまち生命の危機にさらされる。

歴史は巡る、歴史に学ばねば、日本人に明日はないということを肝に銘じるべきであろう。

（令和7年4月）